社団法人　日本膜構造協会主催
「まちなか施設」デザイン提案

凹 / 紡ぐバスストップ

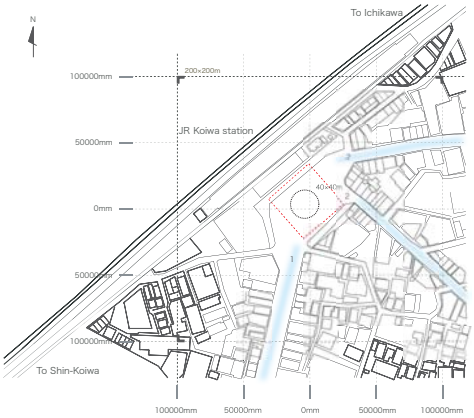
商店街の鮮やかな光景は、その街の活気を表す一つの指標だと思う。
しかし、近隣と商店街の関係はかつての有り様とは変容しつつある。

閉じた商店街を外に少しばかり“ひらく”場所を考えることで､日常の居場所をつくることを考えた。

ＪＲ小岩駅前のロータリー空間。商店街が３つ並び、それぞれが各々の個性を持つ。
しかしそれらが干渉する事はないため、駅前とは一対一の関係性である。
おそらく近い将来、開散とした光景を迎えたとき、つながりを持たないこれらの疲弊は深刻である。

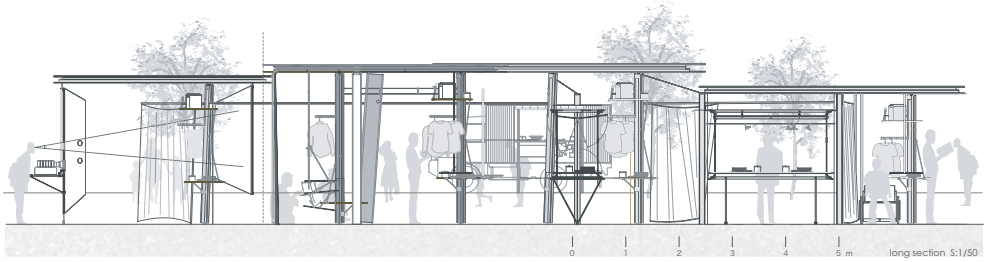
駅前のバスストップは、これらを結びつけるツールである事に注目した。
移動販売車という外からの媒介が、物流と人の流れを新たに持ち込む事。
これを一つのきっかけとする。

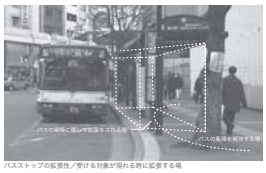
もとの商店街になかった流れを生み出すこのバスストップは、
やがて、人とモノで溢れ出した、たまりの施設として、色とりどりの領域と光景を作り出す。



色とりどりの場面で３つの商店街を紡ぎ合せること

移動販売車やバスが行き交うロータリー空間を、賑わうたむろい空間に変容させることで、まちなかを人々の行為によって活性化させる事ができるのではないか。紡ぎ合わされた商店街は再び、街の中心的な役割を担う事になる。





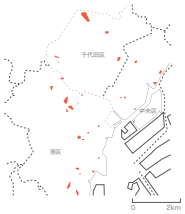
バスストップの拡張性／受ける対象が現れる時に拡張する場

バスストップの流動性／乗降客とにぎやかな場面が誕生する。

パブリックな場所でできること ー計画のきっかけー

まず、商店街を繋ぐ方法としてのロータリー空間に注目した。バスや自動車が一日中動き回るその運動に沿う様に、人が集まる。乗降のみのこの場所に新たな意味を付加することで、３方向の商店街を繋ぐこと、そして商店街の人やモノがこの場所に溢れ出すことが一つのシームレスな公共空間を作り出すきっかけになる。新しいバスストップを考えたい。

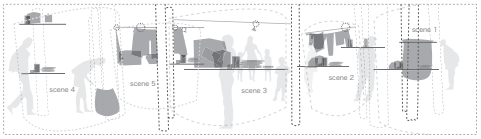
受け皿空間を用意することで、コミュニケーションの触発を期待できないだろうか。または新たなモノやんの流入や滞留、そして３つの商店街の固定化した流動を流動的にする。

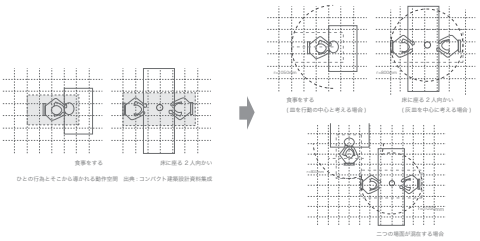


1）都会設計制度の性質上、歩行者が日常自由に通行または利用できる広さを確保する必要がある。
2）自動車を使った移動飲食店は出店に幅員 2m以上の必要。　以上を満たす都心３区の公開空地分布
出典：公開空地の活用手法としての移動飲食店に関する研究　La Huy Vu Nam

モノや人の溢れるきっかけ ー移動販売車を中心としてー

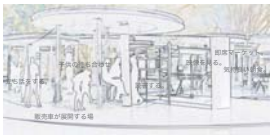
対象として移動販売車、または車両を想定した場合に、バスストップのような受け皿としての緩衝空間は、ひとびとを滞留させる公共空間においてのコミュニケーションの再生をできる、またはモノの溢れ出しの受け皿のような空間になるのではないか。交通手段としての車両、または移動販売車、さらにそれらが提供する場に対して柔軟に変容する空間をまちなか空間のきっかけとする。





すでに定義された行動領域を書き換えること ーモノとひとの行動領域の書換え作業ー

舞台空間の設計手法と場面転換を用いると、モノ（セット）の配置によってひとの行動を定位する操作が行われる。本計画において上記のようにそのモノが要求する最大面積を半径とした円の領域を設定する。この公共空間は、モノの現れ方によって定位される広場となる。

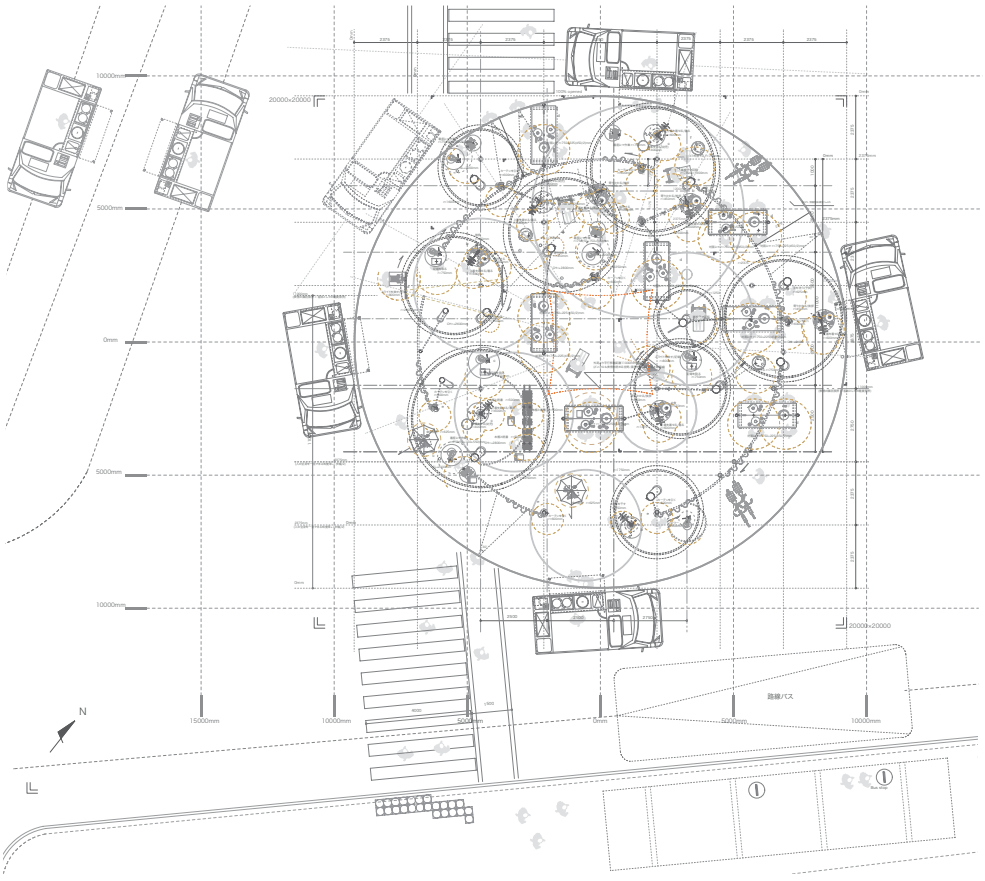


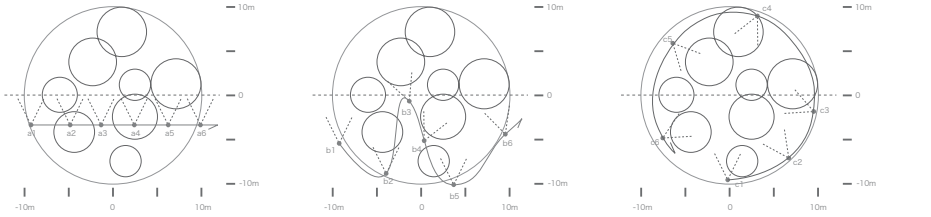
レオナルド・ダ・ヴィンチ『受胎の聖女創・上演の舞台図』

舞台転換が初めてルネサンス期に行われる以前に設計、多場面を同時に並べ、演者が移動し場面の転換を行う。外部空間を場面化する様ふるまった方法だと考えた。車両の受け皿としての空間を用意することと舞台としてまるなか施設。

モノの溢れる様子と繋がる場面　ーある位置に立った時の光景ー

まちの中で行われる買い物やちょっとした会話などの場面がこのバスストップに集約することができるのではないだろうか。商店街はモノで溢れる分、本来同じくらいに人と人の交流の機会があるはずである。縁側だったり廊下のように、障子も全部横に開き、玄関も横引きのドア。日本の美意識は、横長の連続性であり、日本的な美意識が貫かれていると考える。つまりシーンは常に連続する。それらは家の内部まで連続する。しかし、公共空間では、ひとは目的行為を中心に繰り広げるために、“たむろわない”ことが、モノが空間に露にならない理由であると考えた。
モノが使われ方やそれ自身の気配を充明に現すように、支えている受け皿などはなるべく簡素にして、またモノの集まりによって柔らかく空間が分節されていくこと、空間が定位される事、それは同時にたくさんの場面をひとつのキャンバスに描き出すことができるのではないか。





ものあらわれや場面のつなぎ方 ー舞台装置の導入による日常の演劇性ー

場面を考えるときに、行為を行うひと、行われるひとやモノという対立関係の中で、前者から空間は通常設計される。つまりひとがどう動くかで、ものの配置が考えられる。しかし、ある閉じられた小さい場面を想定したとき、モノを中心に動くひとに気づく。モノを中心に空間の記述方法を書き換えてみる。行為の半径をもとに、ものは配置または分散されていく。まるで刻々と変わる舞台装置のように。

利用者の動きと滞留に伴う、場面のつなぎ合わせ　ー連続する光景の多様性が生み出すにぎやかさー

たとえば、この周囲を回遊、滞留する時に、その軌跡は人やモノの離散状況によって、また目的行動によって異なる。しかし単一の柱や、屋根の意匠の共通性または、モノの分散による無中心性によって、光景は場所に関係なく連続して紡ぎ合わされていく。刻々と変容するひととモノのレイアウトによって、延々と続く、響蓋とした森の中の様相を現す。日々、色とりどりの場面に出くわすことのできる賑わいの場。